

まんだら通信

第227号 (通巻262号)

平成27年05月 西暦2015年 佛暦2581年 皇紀2675年

安房国八十八ヶ所 第一番札所
295-0103 千葉県南房総市白浜町滝口1084
真言宗智山派 天神山 紫雲寺 高橋 龍涉
郵便振替 00120-2-43163 紫雲寺
TEL0470-38-4740/FAX 0470-30-5040
<http://www.shiunji.org/>
Mail post@shiunji.org

今年の涅槃会

三十五歳で悟りを開いてブツダとなり、一ヶ所に住むことなく、村外れのお堂や樹の下に寝泊まりし、王侯貴族や最も卑しいといわれる遊女や、農民に至るあらゆる人たちに、聞き手に一番分かりやすい例え話で法を説き続け、八十歳になつて入滅間近になつた時、「アーナンダよ。最後の旅に出よう。」と長年の侍者アーナンダ尊者に仰せになり、北の方角、生まれ故郷カピラバストウ目指して最後の旅にお出になりました。途中クシナガルという寒村まで来た時、「アーナンダよ。私は横になりたい。敷



き物を、二本並んだサーラの樹の間に敷いて欲しい。」とお申し付けになつて、頭を北にお顔を西に向けて静かに横たわりました。急を聞いて駆けつけた村人やお弟子、インド古来の神々などに「私がこの世にいなくなつても、今まで説いてきた教えがすべてだから、怠らず勤めるように。」と最後の教えをお説きになり、静かに入滅されました。それは二千五百年前旧暦二月十五日、満月の夜半のことでした。そして、千五百年後の京都の北の郊外、梶尾の高山寺に明恵上人というお方が現れます。奈良東大寺で華嚴の教えを学び、真言学にも精通する当代切つての名僧と謳われました。後鳥羽上皇などの信任厚く、貴族たちの良い相談相手になりましたが、何より戒律を重んじ、座禅と戒律の修行を重視し、無私無欲に徹し、権力に近づくことはありませんでした。明恵上人はまた、お釈迦さまを思いやること、幼な子が母親を慕うようであつたといわれます。

上人は綿密な計画を立て、天竺(インド)への渡航を企てましたが二回とも叶わず、明石の海に足を浸し「この海が天竺まで続いているのか。」と、さめざめと涙を流し、小石を拾つて持ち帰り、お釈迦さまの形見として、生涯これを手許で供養したと伝えられます。法要『涅槃会』は、明恵上人が音曲をつけ、建保三(千二百十五)年二月十五日に高山寺で初演されました。和文あり漢文ありの詩に節付けしたこの曲は、浄瑠璃など日本音楽の源流になつたといわれますが、お釈迦さまへの思慕が、切々と、聞くもの胸に響き、今日まで連綿と伝えられています。有名な言語学者金田一春彦先生は智山派用の涅槃会の次第に一文を寄せ「この一連の声明は、その前夜に唱えられる名曲佛遺教」と



認知症になつても慌てない

東京の聖路加病院長の日野原重明先生は百三歳、スキーヤーの三浦雄一郎さん八十三歳、智山派の寺田信秀能化さま九十五歳で、何れも私などよりお元気そのものですし、ご近所にも九十歳過ぎて、余裕たっぷり農作業をしてお年寄りもおいでです。日本では六十五歳以上で認知症の人は六人に一人、推定四百六十二万人だそうです。昔は『ぼけ』とか、もつと古くは『もうろく』と言つていたこの病気は、ほんの四十年ほど前までは殆ど聞きませんでした。みんな長生きになつたからと言う人がありますが、長生き村で日本中に有名だったこの辺りでは、八十歳過ぎて元気で朗らかに働いている人は普通でした。その頃、一家の大黒柱のお父さんは都会で働き、家に仕送りをし、残つた家族は、子供は子供なりに子守りや田畑の仕事や家事など、手伝いをしました。お年寄りも、面と向かつてお説教をせずとも、その立ち居振る舞いから、世の中のしきたりや、昔の話などを孫に伝えるという大事な役割を担っていました。家族一人一人に、それぞれ役割があつたということですね。今、世の中の仕組みが変わつて、家族がばらばらに暮らすことが普通になり、お年寄りが子育てを助ける、という役割をしにくくなりました。これが認知症が増えた原因の一つではないか、と私は思います。そうだとすれば、ご近所を家族と同じように考えればいいのではないのでしょうか。どれほど丈夫な機械でも、長年使つていけば不具合が出るのは当たり前です。多少の認知症気味でも、温かい気持ちで支え合うことができれば、進行を先延ばしし、それなりの普通の暮らしができる、私は思っています。何といつても、誰にとつても『明日は我が身』なのです。

もに、はなはだ貴重な文化財である。第一にこれらは、耳に聞いても、美しい音楽的なびびきを持つている。講式の荘厳・秀麗な趣、枯木な味わい、舍利和讃のきめの細かなやさしい情趣、佛遺教経の、心に訴える哀婉な情趣、とりどりに結構である。が、それにもまして、古代・中世日本の音楽が今日に生きている姿として、我々を驚喜させる。：「ところで、こういう素晴らしい曲を紹介する時は、こういう古式豊かな曲も今や影が薄くなつて、廃滅に帰するとしていく云々と述べるのが常であり、智山の声明諸曲はそういう運命にあるもの」とばかり思つていた。ところが昨年二月十五日、智積院で行われた法会に参拝する機を得て驚いた。まだうら若い僧侶の方が、朗々ときわめて規格正しく唱えられたではないか。この一派の方々の、伝統を尊重しようとする気持ちが並々でなかつたことを思いやつて、思わず襟を正したことであつた。」と、こそばゆいほどに絶賛しています。写真は今年、館山市沼の大師、總持院様での法要の様です。音楽的な出来栄は智積院のようには行きませんが、二十人余りのお坊さんと尼僧さんが役割を分担して、一生懸命お勤めしました。毎年の恒例行事で、もちろん非公開ではありませんので、興味をお持ちでしたら總持院さまにお問い合せになると宜しいと思います。偶々、本山からお帰りになつてきたご高齢の能化様も最後まで別席でお勤めになりました。

先日、地元新聞を見ましたら、公立の小・中・高の先生方の昇進・異動の一覧が紙面を何ページも独占しておりました。新任の校長先生の紹介は写真入りでした。

いやあ、驚きましたね。女性の校長先生の多いこと。私が子供の頃は、女性の担任の先生はいらっしゃいましたが、校長先生はほとんど男性でしたから、ここにも時代の流れを感じますね。

こんな小噺があります。

「ほら、起きなさいよ、いつまで寝てるの」
「ぼく、起きたくないよ」

「学校に行かなきゃダメでしょ」

「行きたくないよ。先生たちは意地悪だし、生徒たちにはからかわれるし」

「ダメ、それでも行くのよ、早く起きて」

「なんで、学校に行かなければいけないの？」

「だって、あなた、校長でしょ」

まあ、そんな馬鹿なことはないと思いますが……。今日は、ある地方の小学校の女性の校長、加藤敦子（仮名）先生から聞いた話です。

加藤先生が校長を務める小学校は、地方の小さな町の駅の近くにありました。

もう少し詳しく言えば、第三セクターで、駅長さんひとりしかいない駅を出ると、目の前が二車線の国道で、歩道橋を渡って向こう側に行き、細い道を曲がった住宅街の一面にその学校がありました。全校生徒の数は三百人前後だそうです。いまどき、地方なら普通の小学校かもしれない。

加藤先生は、赴任して二年目。女性の校長先生らしく、きめ細かな教育をモットーに、子供たちとやさしく接していました。特に、先生が大事にしていたことは、「約束を守る」ということでした。

加藤先生は、校長になる前から、ことあるたびに太宰治の「走れメロス」の話をして、子供たちに「約束」の大切さを訴えていました。

純朴な羊飼いのメロスが、妹の結婚のための調度品を買おうとある町を訪れると、そこには人間をまったく信じない暴君が君臨し、人々を苦しめていました。激怒したメロスは王の暗殺を企てましたが、捕らえられ、処刑されることになったのです。メロスは親友のセリヌンティウスを身代わりの人質にして、王に「三日後の日没までに帰ってくるから、処刑を待ってほしい」と懇願し、妹の結婚式に向かったのです。

メロスは急いで村に帰り、妹の結婚式を済ますと、誰にも何も告げずに処刑されるためにだけ、王宮に戻ろうとしました。ですが、川の氾濫で橋が流されたり、山賊に遭ったりして、無理を重ねたメロスは疲労困憊になり、一度は王のもとへ戻るのをやめようと思いましたが、再び約束を果たすために、王宮に向かって走っていき、まさに友が処刑される寸前に王宮にたどり着きます。そして、親友に打ち明けるんですね。「一度だけ、君を裏切ろうとした」って。すると、セリヌンティウスも、「僕も一度、君が戻ってこないかもしれないと思った」と言う。それを聞いた王が、この世には信じられる人間もいるのだと反省し、ふたりを解放したという、教科書に載っていた話ですよ。

先生は、その話をしながら、この学校では赴任以来、特に「交通安全」に関することを生徒に約束させました。というのは、赴任するひと月前に、駅近くの国道で、生徒が慄かれて亡くなってしまうたからです。歩道橋を渡らずに、国道を横切ろうとしたことが原因でした。

「いいですね、皆さん、どんなに急いでいても、歩道橋を渡るのですよ。校長先生と約束してくださいね」

新学期の挨拶の最後は、いつも、この言葉で終わりました。もちろん、先生が赴任以来、生徒の交通事故はありません。

そんな加藤先生に「事件」が起きたのは、秋のある午後のことでした。その日の放課後、「ご主人が心筋梗塞で救急車で運ばれた。すぐに病院に来てほしい」という知らせが携帯電話に入っ

たからです。先生は、時刻表を見ました。すると、次の電車は五分後です。それに乗れなければ、あと四十分待たなければなりません。

先生は、事情を教頭先生に話し、学校を飛び出しました。国道に出ると、遠く線路の向こう側から電車が駅に向かってくるのが見えました。（歩道橋を上がっていたら、間に合わない！）咄嗟に、そう判断して、国道を横切り、電車に飛び乗りました。幸い、救急救命センターの処置のおかげで、ご主人の意識は回復しました。

その翌日放課後のことでした。小学一年生の担任の先生が、教頭先生と校長室にやってきました。そして、こう聞いたのです。「校長先生。きのう、歩道橋を渡らずに国道を横切りましたか」と。校長先生は「はっ」としました。「誰がそんなことを言ったの」「うちのクラスの伊藤優奈という子ですけど……」校長先生は、お約束を破った」というんで、何かなと思って聞いたんですね。

校長先生は、「はい、先生、その通りですよ。昨日、私はみんなとの約束を破ってしまいました。伊藤優奈ちゃんですね。明日、昼休みにここへ連れてきてください」と言ったそうです。

翌日、優奈ちゃんが担当の先生に連れられてやってきて、いきなりこういつて泣き出したので「校長先生、ごめんなさい」。校長先生は優奈ちゃんを抱きしめると、言いました。「ごめんなさいね、優奈ちゃん、悪いのは校長先生です。私がみんなとの約束をぶったのだから。優奈ちゃんは見えていたのね、私が国道を走って渡ったの。優奈ちゃんがそのことを誰にも言わなかったら、私はみんなとの大事な約束を破ったことに気付かなかったかも知れないわ。ありがとう、優奈ちゃん」

そして校長先生は、翌日の朝礼の時に、優奈ちゃんの勇気を褒め、全校生徒の前で土下座をして謝ったそうです。何故、そうしなければならなかったか、言い訳を一切、せずに。

いつか、どこかで、だれかと交わした「約束」、あなたは覚えていますか？

▼立夏も過ぎて、暦の上では夏になりました。山のマテバシイ（とうじい）の若葉がひときわ明るく萌え上がるようです。所々にシイの巨木がありますが、色合いが微妙に違って、山々の美しさが際立ちます。▼1ページの認知症の続きです。憶えたことをすぐに忘れる、自分がしていることが分からなくなる…。私も軽い認知症だと思いますが、そのつもりで付き合えば、残った能力で何とかできると、ど〜んと構えることだと自分に言い聞かせています。

お医者さんは、病気の進み方を先き延ばしするには、人との会話、新聞や書物などを読むこと、読んだら感想を書いてみることを、散歩を心がけること、を勧めています。

日記を書くことなどよいと思います。私は、こうして機械で文字を書くことを覚えたのは、60歳になってからです。自転車と同じで、最初から上手だったわけでは勿論ありませんし、今でも上手とは言えませんが、少しずつ覚えることが楽しみで、いつの間にかこの程度に出来るようになりました。

話し相手がないからと、一日中テレビを見て過ごすのは良くないということです。

気候が良い今のような季節。散歩に出て、道であった知り合いと話をするなど良いことだと思います。

▼今日の産経新聞によると、韓国の新聞『東亞日報』に、「米

国が見る韓国と日本」という記事で「米国の世論調査では、日本の方が信頼できるというアメリカ人が遥かに多く、アジアで日本を悪く言うのは中国と韓国だけで、東南アジア諸国の日本への好感度は、軒並み80%。」と伝えているということです。▼今月の野草は【ラン科オニノヤガラ属】オニノヤガラです。漢字で『鬼の矢柄』と書くように、真っ直ぐに伸びた茎を、鬼の矢の棒に見立てたものです。この季節、田んぼの畔などに点々と生えています。花の形は、なるほどランですが、色、形とも地味この上なしで、写真としては見栄えは良いとは言えませんね。 2015.05.09 龍涉



